

大学生のコミュニケーション能力育成のための臨床心理学的カリキュラムの開発（４）

—大学生のインタビュー調査からみる大学生活におけるコミュニケーションに関する経験と自己概念との関連—

○西まゆみ・山本文枝・藤沢敏幸・船津守久

(安田女子大学心理学部)

問題と目的

近年、社会性の発達に難しさを持つ、自閉症スペクトラムの学生が注目を集めている。なかでも、問題が軽微であるために気づかれにくいグレーゾーンの大学生の支援のために、コミュニケーション能力育成のための臨床心理学的カリキュラムの開発が望まれており、現在、発表者らはこれに取り組んでいる。その基礎的知見を得るため、大学生のコミュニケーションに関する経験と自己概念に関するインタビュー調査を行った。これは、大学生活においてコミュニケーションに関する経験に変化があったか、それに伴い、自己概念に変化があったかを明らかにするものであった。

方法

調査協力者 広島県内の大学生 52 名。うち、筆頭発表者が担当した 16 名を分析の対象とした(男性 1 名、女性 15 名、平均年齢 19.88 歳 SD=.86)。

調査時期 2017 年 1 月～2 月

手続き 調査に先立ち、大学生のコミュニケーション能力育成のための臨床心理学的カリキュラムの開発に関する WEB 調査を行い(山本・西ら, 2017)、その中で調査協力者を募集し、応募した大学生に、発表者の所属大学内でインタビューを行った。インタビューは調査協力者の書面による同意を得て録音された。約 50 分間であった。

質問項目

●質問 1 : コミュニケーションの経験

①大学生になってから、自分の意見や考えを伝えたいと思ったときに、すぐにそれを伝えた経験の有無。または現在、そのようにしているか。②どのような場面でそれをしたか。反対に、言いたくても言わないこと(場面)はあるか。③その理由。

●質問 2 : 自己概念

①大学生になって、変化したと思われる自分のイメージの有無、②変化があった場合、どのような変化か。③変化するきっかけとなった経験(エピソード)

分析の方法 録音されたインタビューを再生して文字化し、分析した。

結果と考察

自分の意見や考えを伝えた経験は、あると答え

た者が 11 名、ないと答えた者が 5 名であった。

次に、自分の意見や考えを伝えた場面、言いたくても言わない場面を表 1 に示す。

表1 伝えた場面、言いたくても言わない場面
<伝えた場面>
友達との会話。どこに行きたいか、など。春休みの旅行。自分の意見が役に立つ、正しいと感じた時。オリゼミで使う暗幕について。
課題を休んだ友達に伝える。
<言いたくても言わない場面>
しゃべりが下手なので、言いたいことを整理してからでないと伝えたい。整理している間に次の話題に移ることも。
伝えていいものか、ワンクッション置く。相手を傷つけるのではないかと怖い。

伝えた場面は、親しい友人に対する場面や、自分の意見が必要または役立つと思える場面であり、逆に、言わない場面は、自分の意見を整理しないといけないなどであった。

次に、大学生になって、変化したと思われる自分のイメージについては、あるとした者が 13 名、ないとした者が 3 名であった。

変化した自分のイメージを表 2 に示す。

表2 変化した自分のイメージ
合わせなくなった。前向きになった。
今私の話を面白く思っているかにより気が行くようになった。
色んなところに一人で行くようになった。
わがままと思われるようになった。前より率直になった。
積極的、社会的になった。
カッコつけるようになった。家族にも、だらしない姿を見られないように努力するようになった。

変化の内容はおおむね、自己概念が肯定的に変化したことを示すものであった。

変化のきっかけとなった経験(エピソード)を表 3 に示す。

表3 きっかけとなった経験
大学になって自由になって体調がよくなり、自分の体に関する重荷が解けた。
一人で友達のいる地方へ旅行に行った。
母が職場を変ってから母の愚痴を聞くようになった。
サークルの先輩と同じ趣味について、初対面の時にいっぱい話して。
一人暮らしを始めて、それをちゃんとやっているというアピールのため。きょうだいと違ってちゃんとやっている。

経験はおおむね、大学生としての生活の開始に伴うもの、社会関係の広がりに伴うものであり、それらは自己概念の肯定的な変化を導き出していた。

引用文献

山本文枝・西まゆみ・藤沢敏幸・船津守久 2017 大学生のコミュニケーション能力育成のための臨床心理学的カリキュラムの開発(1)―自閉症スペクトラム指数と自己概念との関連―日本心理臨床学会第 36 回大会発表論文集 453.